

第8回 新たなビジョン推進会議 議事要旨

日時：平成22年9月17日（金）10：00～12：00

場所：市役所1号館 14階 大会議室

1. 開会

2. 新たなビジョン「検証・評価結果」について

資料1「新たなビジョン（「神戸2010ビジョン」・「区中期計画」）の検証・評価の公表」により、事務局から報告し、神戸2010ビジョン検証委員会会長から検証結果に対するコメントをいただいた。

〈2頁のとおり〉

3. 神戸づくりの指針中間とりまとめ案及び重点施策計画の策定状況について

資料2「「神戸づくりの指針」中間とりまとめ（概要版）」及び資料3「重点施策計画（案）」により、事務局から報告し、意見交換を行った。

〈3頁のとおり〉

4. 市長あいさつ

矢田市長より、閉会にあたって次のようなあいさつがあった。

震災10年を契機に今後の神戸市をどうしていくかとの議論があり、その方向性を示す計画である神戸2010ビジョンを平成17年6月に策定した。また、この計画を着実に実行していくため、PDCAサイクルを導入し、この6年間、取り組みを進めてきたところである。

この取り組みを進めていく中で、非常に時代の変化も激しく、見直しをしなければいけないものや新しい視点で組み立て直さなければいけないものが出てきている。

それらを踏まえて、現在「神戸づくりの指針」と「重点施策計画」の策定を進めているが、次の「重点施策計画」についても、PDCAサイクルを駆使しながら、そして、市民にもこれらの取り組みを理解していただきながら進めていきたいと考えている。

また、本日いただいた意見を大切にして、市民との協働と参画により、これからの市政を途切れなく展開していくことが重要であると考えている。

委員の方々には、引き続きご支援をお願いしたい。

5. 閉会

新たなビジョン推進会議で出された意見等

新たなビジョン「検証・評価結果」について

◎委員（検証委員会会長）

「神戸 2010 ビジョン検証委員会報告書」を去る 9 月 13 日に市長へ提出した。本年の検証委員会の作業については、この報告書の 3 ページの 2 (1) 活動報告の①～④に集約されている。

1 つめの作業であるが、平成 21 年度の取り組みに対する目標達成状況の内部評価について、チャレンジ指標の状況や 21 年度に実施した施策の進捗状況等を総合的に検証し、その結果、概ね妥当であると判断した。また、49 の施策のうち、A 評価が 31 施策、残り 18 施策が B 評価となり、A 評価が 6 割を超えたということで、概ね順調に進んでいると総括している。

2 つ目の作業であるが、本年が計画の最終年度であることから、最終見込みについても確認した。目標達成できる見込みが 35 施策、残り 14 施策が概ね目標達成できる見込みであり、市が内部評価した 49 の施策の目標達成状況の最終見込みについても、概ね妥当であると判断した。

3 つ目の作業としては、引き続き取り組むべき課題に対する意見をまとめた。

4 つ目の作業として、検証・評価制度のあり方に関する意見をまとめた。

制度導入時には、他都市での導入事例もなく、この 5 年間、非常に先進的な取り組みとしてこの検証・評価を試行錯誤の下に行ってきた。その意味では、神戸市の画期的な行政改革の一端を担う作業であったものと考えている。

そのような施策評価を先進の自治体としてやっていくことの誇りと、本当に孤立というか、試行錯誤を繰り返すという大変難しいものではあった。

このような経過の中で、何を指標の数値とするべきかなどの難しい問題や評価制度のいろいろな改善点も見えてきた。これらについて、専門家の意見もいただき、かつ私たち自身も 5 年間やってきたことの総括や反省点をまとめたものである。

以上、市長の肝いりのもと、PDCA サイクルとの新たなチャレンジをしてきたものであるが、当会議の委員の皆さんの取り組みも含め、協働と参画が進み、そして、このような具体的な目標を掲げた上で、年度ごとの点検をしていくという作業が一層進んだものと思っている。

◎委員

恐らく全ての施策で A 評価、達成することは無理だろうと思っている。指標の中には、必ずしも達成できるとは言えないものも含まれているし、取り巻く環境がリーマン・ショックも含めて変わってきているが、一気に計画の全てを見直すことは難しい。

ただ、大事なのは検証・評価のプロセスであり、このような検証作業を 5 年間続けたというプロセスがあれば、その中でマイナーチェンジはできるわけで、結果を見てどうこうというよりは、そのプロセスの中で新しい改善などが発見できる。

よって、この 5 年間やってきたことの意味は、最終到達点としては、もちろん全部が A 評価となればいいが、できなかったとしても、このプロセスを続けることが大事だと

いうことを残せたことが評価できるのではないか。

◎委員（検証委員会会長）

全てを達成することが無理とのことについて補足説明すると、震災復興にあたり、「元氣な神戸、みんなで頑張ろう」ということで、ある種スローガンの的に、「100%を目指して頑張らしましょう」というものも目標に入っており、100%の達成は、初めから無理ではあるが、やはり市民へのメッセージとして必要だろうというものもある。

しかし、そのようなスローガンのもの、市民へのメッセージ的な目標と本当に施策の効果を見ていく目標とを分けて考えた方がいいのか、あるいは、混在させて中に入れていくということ、市民と一緒に頑張らしましょうという姿勢を出すか、このあたりは工夫のしどころであるということは、5年間やってきた結果、見えてきたことである。

◎議長

いわゆる「基本計画」と名のつくものは随分あるが、従前は、計画の策定とその計画の実行がどう対応しているのかがはっきりとしておらず、計画の進捗が市民の目から見てもよくわからなかった。

今回、このような検証作業を繰り返すことで、また、その結果を市民の皆さんに公表することで、計画が持っている指針としての意味に加えて、ある種行政としての約束とその結果が目に見える形で示されたものと言え、非常に意義が深いものであったと思う。

神戸づくりの指針中間とりまとめ案及び重点施策計画の策定状況について

◎委員

1点目は、地域商業についてであるが、現在、商業者の相談窓口が本庁の商業課しかない。まちづくりや地域活性に関して、地域商店街の人間として頑張っていて取り組んでいるが、相談に行こうと思っても、身近な区役所に商業者が相談できる窓口が全くない。まちづくり推進課などに商業者が行っても、一歩引かれてしまうことがある。今後の地域商業の活性化には、「まちづくり」の要素がかなり含まれると思われるので、区役所にも相談できる窓口を設けていただければと思う。

2点目は、子どもの教育についてである。先日、神戸市の先生の2次試験の面接官をさせてもらった。その中で、ロールプレイングの形で、中学校で現実に起こっている30～40の問題を現役の先生が演じて、それに対してどう動くかということをやっていたが、その内容を見て、先生が生徒を呼ぶにも「さん」づけしないといけないなど、余りにも子どもに対して気を遣い過ぎではないかと感じた。神戸市の教育に関しては、子どもに余り気を遣いすぎないようにすべきではないか。その先には恐らくモンスターペアレンツの問題もあり、親の教育もしていかないといけないと思われるが。

「企業は人なり」であって、人によって企業の体制も変わってくるものである。今後、神戸市も子どものあり方によって変わってくるものと思う。子どもを甘やかすような、親を甘やかすようなことでなく、気を遣わずに、もっとビシビシといくようにしてもらいたい。子どもの教育について、神戸市独自の取り組みを是非考えていただきたいと思

う。

このような取り組みへの第1歩として、武道（柔道）教育から始めてはどうか。

◎委員

重点施策計画として、細分化された多くのすばらしい提案が挙げられているが、これらを一一つ進めていくにあたって、検証は非常に重要と考える。

先程報告のあった神戸2010ビジョンの検証も、大変な作業であったと思う。しかしながら、「神戸2010ビジョン検証委員会報告書」の17ページの「くらしの満足度」を見ると、最初からポンと上がって、この計画以降、5年間ずっと大体一定の割合となっている。確かに高い点であり、神戸市民は他の都市に比べて満足しているとまとめられているが、変化がないということが問題なのではないか。5年間、しっかりと取り組んでいるのに、ずっと同じ満足度となっており、普通なら右肩上がりとなるのが理想であるのに、そこまで市民には行き届いていないとも読める。評価としては、項目ごとに達成が認められ、良い評価となっているが、果たしてそれがどれだけ最終的に満足度につながっているのか。

次の計画の検証にあたっては、そのような部分もチェックしていく必要があるのではないか。1万人アンケートについては、なかなか分析等が難しいとは思いますが、その辺の一工夫が必要ではないかと考える。

また、医療産業都市構想の評価をもっと厳密に行うべきである。ポートアイランド内に誘致された医療関連の事業者を含む一般市民からの意見も取り入れる形で実施することが必要ではないか。

さらに、医療産業都市構想と医療ツーリズムとの関連について、観光分野と一緒に議論・検討できる場を持っていただきたい。早急に取り組まないと全国の他の地域に比べ手遅れになると思う。

◎委員

子どもの教育にはもっと力を入れなければいけないと思っている。

「学校教育の充実」といえば、非常に難しいようで、考え方によっては簡単な部分がある。

例えば、私たちの地域では、新しいモデル校「寺小屋」に取り組んでおり、学校の授業についていけない子どもたちに対して、教職員のOBの方に教育を指導してもらい、我々は地域として支援している。

学校がおもしろくないのは、授業がわからないからおもしろくないのであって、結果、登校拒否となったり、非行に走ったりするのではないかと考え、このようなことに取り組んだものである。

先日の8月1日、地域として防災訓練を行った際、この「寺小屋」の生徒の宿泊訓練を実施した。私たち地域の者と学校の授業についていけない子どもたちが仲よくすることで、勉強はそんなにできなくても、生きる新しい力を見つけてほしいという趣旨で、実施し、非常に効果があったものと考えている。

学校の教育を充実するためには、私たちがやっている「寺小屋」のように、教職員の

OBや地域の人と一体となった取り組みを、行政は強く推進しなければならないと思う。言葉のひとり歩きではだめで、具体的に何をやっていくかということ行政もしっかり考えていただきたい。

それから、神戸 2010 ビジョンの「豊かさ創造都市のこうべ」の「豊かさ」であるが、もちろん所得の裏づけがなければ、「豊かさ」は表現できないと思うが、本当の「豊かさ」とは、人と人とのつながり、人を思いやるということも重要である。そのような相手を思う気持ちを地域の中で広めていく、また、広めることを行政が支援していくような取り組みを進めていただけたらと思う。

◎委員

子どもの問題が特に気になっており、最近、元気な子が余りおらず、特に「男の子の目が死んでいるな」と感じている。

重点施策計画を見ると、わんぱくな子、バイタリティ豊かな子どもを育てていくという項目が薄いのではないかと思う。中国に行くことがあるが、向こうの子どもは、ものすごく元気で、これから日本人は彼らとやり合えば、「負けそうやなあ」という気がする。わんぱくというか、創造力豊かに、またバイタリティのある、負けない、競争力のある強い子どもを育ててほしいので、その点に関して、神戸市独自の施策をつくっていただければと思う。

◎委員

観光交流の推進として訪日来客の課題が重点施策計画に記載されている。特に今、中国からの観光客が注目されているが、神戸は残念ながら中国から団体ビザで来られる観光客のゴールデンルートからは外れている。しかしながら、これは語弊があるかもしれないが、私はよかったのではないかと考えている。その理由は「ゴールデンルート」と言われている現状のコースでは、非常に忙しい行程となっており、必ずしも観光客の満足度が高くない状況にあるからである。ゴールデンルートで忙しく観光されている間に、今後リピーターになって日本に来ていただく時を見据えて「神戸ビーフを食べてみたい」、「港まちでゆっくりしたい」と思っていただけのような神戸情報をどれだけ提供できるかについて考えてもいいのではないか。団体だけでなく、個人ビザも緩和されている中で、例えば、プライベートジェット機で来て、有馬温泉に1週間滞在して、買い物は電化製品を一切買わずに、心齋橋に行ってブランド品を買うというような観光客も増えてきている。そのような方は、経済的な効果が非常に高いので、国別の志向もマーケティングした上で、段階別に満足いただけるような対応を考えていくことも必要ではないか。

それから、「住み続けたいまち」とのキーワードはすごく大事で、神戸に来ていただく観光客にも、重要なポイントになると考える。

JTBでは、9月まで「日本の旬 関西」として、関西キャンペーンを行った。その一環として「関西まち歩き 100 選」を実施し、これは地元ガイドさんをご案内する1時間から1時間半の予約不要・参加費不要のガイドツアーだが、そのガイドさんのファン、「このガイドさんの話を聞きたいから来る」という方が増えてきている。観光が物見遊山目的でなくなったということはよく言われているが、その地域の人と同じような生活

をしてみたい、その地域で暮らしている人がされていることを体験したいなど、その地域での身近な楽しみを求めている。たくさんのお金はかけられないが、できるだけ身近な魅力を満喫したいというお客様が増えてきている。

そこでポイントになるのは、その地域が本当に好きで、自分のまちを自慢したい、しゃべりたいという人たちがいらっしゃるかどうかということ。そういう人たちと接していただくと、「それじゃ、今度は季節が変わって桜のころにまた来るね」というような話からリピーター化していく。一方で、地域に住んでいる方も、次回の来訪を楽しみにして、元気でいよう！ということにもつながるのではないか。先程も話のあった子どもについても、こういった交流を学生のころから経験しておけば、今後のまちづくりという点でも重要な経験になるのではないか。

「おらがまち自慢」、「住み続けたい」、「まちが好きだ!」、「神戸が大好きだ!」ということが基本となるのではないかと改めて思う。

◎委員

神戸 2010 ビジョンのチャレンジ指標をみると、『『あいさつする近所の人』が 10 人以上いる人の割合』が 53.7%から 45.4%に落ちているが、リーマン・ショック等による不景気が影響しているものと理解していた。ところが、他の指標をみると、イベントの数や「日常的に文化活動を行っている人の割合」は増えている。その他にも「青少年の健全育成の手助けをしている市民の割合」が 19.3%から 13.5%に落ちている一方で、「日常的に運動やスポーツを行っている人の割合」が 46.3%から 55.2%に上がってきている。

これらのことからすると、単に不景気が原因なのではなく、地域コミュニティが急速に崩壊しつつあるのではないかという危機感を持つべきなのではないか。そうであるならば、総力を挙げてこのコミュニティの再構築に力を向けていかないと、とんでもないハイコスト・ローパフォーマンスのまちに化けていく、その転換点に来たのかもしれないという気がしている。

これは、議会の議員の方にも大変関心の深いことであると思う。つまり、政治のメルティングダウンが起こる可能性がある。イメージ選挙、ムード選挙により行政が振り回される危険性も出てくる。地に足をつけた人たちが投じる票こそ草の根民主主義だと思うので、そのような意味での危機感を感じている。

◎委員

「子ども」についてであるが、国から新たな施策が出てくることを待つだけではなく、新たなシステムをつくっていかないとカバーしきれない現実がある。

このようなシステムをできるだけ地域住民の方々や従来の学校でのシステム、それから、いわゆる社会の地域システムなどを活用することも大事であるが、それを超えるような新たなシステムづくりを検討していく必要があると考える。

また、「神戸マラソン」が開催されるとのことだが、とても期待している。ウォーターフロントの開発と神戸マラソンとをつなげるべきで、海からマラソンを観戦しながら、同時に神戸の観光開発にもつなげてもらえればと思う。

◎委員

観光と外国人との関係について、観光が将来の投資や起業家を呼び込むきっかけになって、その人たちが定住していき、明日の神戸市民になるという観点からの観光施策を進めてもらいたいと思う。

重点施策計画の122ページの③に、韓国人なら温泉とお酒、中国人ならグルメとショッピングとの記載があるが、これは非常に即物的で即時的な対応だと思う。神戸が包容力のあるまちで、寛容なまちで、定住したらすばらしいことがあると感じてもらえるような、もっと文化を掘り起こし、それをつなげていくような観光ルートを開発し、宣伝していくことの方が重要ではないか。

一例であるが、有馬温泉に行って有馬温泉の歴史を読んでいくと、最後の方に「〇〇年に蒋介石が来た」と一言書いてあるだけであったが、これを写真やホームページなどにつなげていくべきと思う。他にも孫文であれば、神戸にも来ていて、いろんなところに足跡がある。それにすぐ飛びついてもらえる方は、そんなに多くないかも知れないが、海外も含め、そのような層はあるので、たくさんのリピーター、また将来神戸市民になるかも知れないリピーターのことを考えた観光の開発も進めていただきたい。

また、その時には、神戸市は教育の面で外国人学校が充実しているというメリットはあるが、外国から来られる方がお金持ちとは限らないので、神戸に来て親が一生懸命四苦八苦しなから定住していく時に公立の小学校に外国人の子どもが通う中でスツとなじんでいけるような制度、非常に難しいとは思いますが、その外国人児童のケアも、教育委員会等々を通じて、きめ細やかな施策を進めていくことが重要ではないかと思う。

◎委員

先日、テレビで民生委員のことを取り上げているのを見て、知り合いと「民生委員が要らないような社会を本当は目指したいよね」と話をしていました。

しかし、民生委員の方もボランティアであり、幼児虐待やひとり暮らしの老人への対応について、そのような方たちに依存している部分がどんどん大きくなっている。給料をもらっている人以上に、地域に対するたくさんの愛情、熱意を持って仕事に挑んでいるボランティアの方たちに依存していることは、私としては非常に胸が痛い。

観光においてもボランティアが倍に増えて、それはすばらしいことだと思うが、ボランティアの方は、仕事ではないので責任がなく、その方の善意だけに依存している。ところが、仕事として関わっている人は、ノルマがあったり、締め切りがあったりする中で、何か数字的に達成しなければいけない時に、ボランティアの方たちにその部分をお願いするわけにはいかない。そうすると、結局はその取りまとめている人たちに負担がどんどんかかってきて、その大勢のボランティアを取りまとめるために仕事が増えるという、何か一つの矛盾みたいなものがあるのではないかと感じている。

ここは税金を投入してでもやるべきだと思うところには、ボランティアに依存していた部分を一部有料にしてでも、「ある程度絶対にここまではやってもらう」とのやり方も考えていくべきではないか。

それから、重点施策計画の中に「三宮駅の開発」などが記載されているが、今後、海外からの観光客を迎え入れるにあたって、神戸はインフラが充実していない。今の神戸

ではとても恥ずかしくて、なかなか外国人の方に「個人旅行で来てください」とは言えないぐらい不親切なまちになっていると思う。

試しに全く日本語がわからない外国人の方に三宮駅に立ってもらい、「あなたは、ここから1人で南京町まで行ってください」とか、「1人で有馬温泉まで行ってください」とお願いして、どこでつまづくかをチェックすれば、どこに問題があるかすぐにわかると思う。その辺からまずやっていかないといけないのではないか。

それから、「ウォーターフロント」も期待はしているが、この間の「神戸プラーージュ」のような一時的なもので活性化を図るのではなく、もっと長期で、景観等も含めて本当に何が必要なのかを考えたいうえで、取り組んでいただきたいと思う。

◎委員

重点施策計画の目次の記載についてであるが、テーマ1「くらしをまもる」の(5)「障害者の自立と社会参加の支援」については、「参加」には責任が伴わないので「自立と社会参画」とし、「支援」ではなくて「推進」とするべきである。障害がある人たちも企画から加わって責任も担う、そのような時代に来ているし、ユニバーサル社会というのは参画する社会なので、「障害者（チャレンジド）の自立と社会参画の推進」としていただきたい。

もう一点、「支える仕組み」でテーマ9「人と人とのつながりを深める」、テーマ10「行政の「つながる力」を高める」とされており、このつながるためにICTが非常に大きな力を発揮するわけであるが、残念ながら神戸市は多くの自治体の中でも、このICTの分野でのつながりや発信、広報という部分、すなわちICTの「戦略的活用」がまだまだ弱いと思う。

この点は、市長が指導力を発揮していただき、「つながる道具」「発信する道具」として、これを「支える仕組み」に記載すべきかの検討は必要であるが、ICTによるつながりや発信、支え合いの強化といった点を計画に入れていただきたい。「つながり、支え合い、発信するICTモデル都市 神戸」との理念、ミッションを掲げ、ICTの分野でも神戸には尖がってもらいたい。

◎委員

テーマ4の「産業を活性化する」に「環境産業の育成」を入れてはどうか。資源・エネルギーに制約があることはわかっており、グリーン・ニューディール政策の日本版も国内ではっきり示されていて、スマートグリッド関連ビジネスなど、例えば、省エネ製品関連ビジネスなどに関して、新聞に掲載されていない日がないぐらい、環境関連産業が非常に重要となってきた。そのような状況であるのに「産業を活性化する」の中にはそれらの文言がないので、少しでも入れておく方がいいのではないかと思う。

◎委員

これらの計画は、社会資本の整備や社会基盤の整備などが基本になって、そこから派生してくることが非常に多いと思われる。それはハード面だけでなく、ソフト面も大いにあると思われる。また、最近の世の中は、非常に変化が激しい状況にある。

そのような中で、いろいろな施策をP D C Aにより取り組んでいくことは非常に大事なことだと思うが、その中に一つ、「M: マネジメント」という要素も取り入れて、それにより方向性をまた新しく見出していくようにする必要があると考える。

◎委員

現在、新長田では鉄人 28 号のモニュメントがあることで、その付帯イベントが低予算で数千人の人を集めるパワーを持っている。商店街の活性化イベント、音楽イベント、ファッションショーなど、いずれも 2~3,000 人を集める大イベントになっている。おもしろいのは、そこに来ているのが、6 割がエリア外からの来客ということである。

しかも、「鉄人 28 号」一本でいくと、すぐ飽きられると思うが、その後に「三国志ミュージアム」をつくって、まちの商店主を三国志に扮装させて、イベントに参加させるという非常に立体的な展開もしている。そこには、アジアの観光客にもこぞって来ていただいている。

このような目に見える効果を上げている観光資源を神戸市はもっと活用するべきではないか。「神戸空港」も「鉄人空港」にするぐらいのことを考えてもいいのではないか思っている。

また、それらのアイデアのほとんどが、民間の方の 1 人の頭で生まれていることにいつも驚かされている。このようなアイデアを持った方と一緒に取り組むことで、もっといろんな地域の活性化が進んでいくのではないかと期待する。

◎委員

重点施策計画の 3 ページの図はうまくまとめていると思うが、結局、この図は 12 のテーマの関係図でしかない。むしろ、運用の仕方が大事なのであって、行政の具体的な対応があって、初めてこの 12 のテーマの関連図が生きてくるので、「絵に書いたもち」にならないようにしていただきたいと思う。つまり、計画に魂を入れるためには、だれが、どこで対応するのかを示す必要はあるのではないか。

個別の施策のところに「協働の取り組み(パートナー)」の記述が例示としてあるので、そこを見れば、だれと一緒にやれるのか、どこに行けばいいのかということは見えてくるが、もう一度改めてどの部局・機関が受け手、相談相手、パートナーなのかを示していくことも大事である。

それによって、縦割りではなく、本当の意味で横断的にみんなの協働が実現できるわけで、例えば、図にそれらを示して、見える化することにより、意識づけにもなると思われる。

◎委員

会社は人材力が大切であるとよく言われるが、神戸市でも、市民の人材力が大切であると感じている。その中で、神戸市は、幼児教育から大学を含めて高等教育まで充実していると思う。

また、よく言われる「神戸っ子」のような言い方は他都市ではあまり言っていないと思われるので、「神戸っ子」というのは一つのブランドであり、デザイン都市・神戸の大

きな資源ではないかと感じている。

ただ、神戸で育った子どもが、優秀になって、外へ出ていくことも非常に大切なことであるが、その外に行った人に、やはり神戸に戻ってきてもらい、神戸をまた育ててほしいと思っている。

神戸 2010 ビジョンの産業プランの「新事業創出・経営革新の支援」はB評価となっているが、それを引き継ぐ形で、重点施策計画の33ページの「KOBE ドリームキャッチプロジェクトによる支援拡充」があり、その中で、事業の継続だけでなく、「また」以降に「起業家の裾野拡大のため、大学との連携や女性、企業退職者を対象とした起業啓発・支援」と記載いただいている。この KOBE ドリームキャッチプロジェクトでは、既存の企業を育てるといふ部分が大きいと思われるので、「また」以降の大学との連携により学生に創業してもらおうとか、女性に起業してもらおう際の支援にも力を入れていただけたらと思う。

その結果、トータルで「神戸っ子」が地域に根づいて育っていく、全体で神戸の人材を育てていくことになると思われる。

◎委員

1点目は、検証時に数値を見て「A」「B」「C」との評価をつけることは、非常にわかりやすく、意味はあると思うが、前年から連続してAとなった場合には、例えば、保育所の数は増えたが、保育の質が落ちていないか、前年から連続してBとなって表面的には停滞しているようでも、質が上がっているとか、そのような点も一部検証に入れてはどうか。検証・評価シートの文章中にそのようなことが記載されているものもあるが、項目を絞って、そのような質的なチェックも必要ではないかと思う。

それから、重点施策計画の「いのちを守る」について、DVでは「全国女性シェルターネット」等があるが、高齢者や子どもの虐待にもそのようなものを設けられないか。近所の通報などにより警察が関与しようと思っても、特に高齢者の場合、家族の中での問題ということで、なかなか入っていけない。最近、私の近所でもそのようなことがあって、結果的に1人の方が亡くなってしまった。警察では関与できなくても、少しでも市でサポートしてあげられるようなものがないのかと思う。

また、今年の猛暑で高齢者の方が、エアコンがなくて亡くなったという話をよく聞いたが、他都市で一時的にクーラーの部屋を用意したケースもある。神戸市ほどの規模になると、そう簡単にはそのような対応はできないかも知れないが、今後もこのような思いがけないようなことで命が脅かされることが増えてくる可能性を考えると、そのような時に何か小回りのきく、緊急に対応できるシステムを保健所や福祉施設などのいろいろなネットワークを通じて設けておくべきではないか。今後も猛暑が続くことがあるかも知れないし、高齢者の虐待やDVなどを考えると、小回りのきく緊急対応ができるようなシステムを考えていただきたいと思う。

◎委員

「食の安全」に関して、地産地消を唱えて、学校給食に何品か入るようになったことは、とても嬉しく思う。また、献立表にも「この作物は兵庫県産ですよ、神戸産ですよ」と書いてあって、親にもわかるようになってきていることはとても嬉しく思っている。

今後も一品でも多く、地元のものを取り入れていただくようお願いしたい。

フランスでは、有機栽培の農作物は2割高いが、1割は自然環境保護のため、あと1割は農家の保護のためとのことである。農家にしても、どんなものでもいいから、つくって、売ればよいという人もいれば、いかにしておいしく、農薬を減らしてつくるかという人もいると思う。そういう観点で、地産地消の推薦だけでなく、生産者にもちょっと目を光らせていただき、安全な食品が手に入るようにしてもらいたいと思う。

◎委員

この5年間は「意外と早かったなあ」との実感で、それだけ世の中がめまぐるしく変化したのだと思う。

参考資料の「神戸2010ビジョン関連年表」を見ながら、このような感想を持ったものであるが、できれば、各項目に「月」と「日」、少なくとも「〇月」程度は入れてもらえれば、資料価値がもっと高まったのではないかと思う。

一事が万事であり、重点施策計画の107ページのテーマ10「行政の「つながる力」を高める」とあるが、「つながる力」というのはサービス力と私は理解したい。次期計画においても、コミュニケーション力、サービス力に留意いただきたいと思う。

◎委員

重点施策計画の44ページのテーマ4「産業を活性化する」の重点施策(2)「ものづくりの技術向上・人材育成支援」であるが、次世代スーパーコンピュータやバイオメディカルクラスター化の推進、あるいはロボットなどを軸とすること自体に反対する人は余りいないと思うが、ただ、それぞれがすごく大きな投資規模を必要とする産業に対して、神戸市として、どれだけの支援ができるのかを考えた時、大風呂敷であっても困るし、かといって、中小企業からの助成の募集を出して、少額な額で支援しても、本当に生きたお金が使われるのだろうかという危惧されることになる。

そこで、一つの提案であるが、スーパーコンピュータであれば、シミュレーション工学の適用領域として、例えば都市計画を重点的に募集するなどの指針を出して、震災の被害を受けた神戸市として、考え方や経験が生きるようなところで、もう少しめり張りをつけた支援をしていくとの方向性を出した方がいいのではないか。

◎委員

重点施策をまとめる委員会を預かっている立場として、本日いただいた意見をいろいろな形で反映できるよう事務局とも相談していきたい。

◎議長

神戸2010ビジョンに関わり、そして、その推進に非常にご尽力いただいた皆さんから次の計画へ引き継ぎをしていただく大変意義深い会議になったのではないかと思う。

この会議は、震災復興の10年目の総括・検証の中で、ポスト復興計画として、単なる中期計画ではなく、神戸がこれから震災復興からどのようにして新しい時代に立ち向かっていくのかとの観点で策定した神戸2010ビジョンを推進していくため、市長の強い思

いを背に発足したものである。

平成 16 年 4 月 23 日の懇話会が最初であり、それ以来 6 年を超える間、皆さん方から熱心なご討議や提言をいただいた。

この取り組みは、震災復興の中で再確認され、神戸 2010 ビジョンの掲げる基本姿勢であり、また、次期計画の大きな基本理念でもある「協働と参画」、これがまさに実のあるものとして実践されてきたものと思っている。これまでの取り組みを市民のいわば財産として、次期計画や今後の市政に生かされることを期待している。